

21 幼児と音声翻訳機・ポケトークを用いた遊び

筆者は、ポケトークSなど**音声翻訳機**は大人が外国に旅行したときに、別の母語の人と意思疎通をするのに便利なICT機器だと考えている。

卒業生Lがアメリカの日本人幼稚園で働いているとき、日本語も英語も話すことができる幼児が、音声翻訳機を用いて遊ぶ姿を見たという。教育への応用の可能性を示す。音声翻訳機については横井一之（2020）にまとめた。

● 音声翻訳機への子どもの興味（2020年1月28日）

初めて子どもたちと一緒に音声翻訳機を使ってみた。ほぼ英語しか話さない男児に使用するように伝えたが、翻訳機を近づけると恥ずかしがっていたのか喋らなくなってしまった（普段はよくしゃべる子である）。そのため、色々な子どもに使ってみたが、その中のアメリカ人の父と日本とペルーのハーフの母の4歳女児N児の例を挙げる。

日本の幼児でも、「幼稚園の給食でパイナップルを食べます。私はパイナップルが好きです。」と、理路整然と話することはできない。先に“I like pineapples.”と言い、“Because…”という。接続詞などは上手く扱えなかったが、基本的な文章はできているので、日本の幼稚園の幼児と同じぐらいの発達段階だと思われる。

不完全な英語の入力に対して、音声翻訳機はほぼ入力したまま日本語に翻訳している。疲れを知らない通訳だという感じを受ける。

N児は日本語も英語も上手に話すことが出来るため、自分が話した英語が正確に日本語で表れるとびっくりした表情をしていた。逆に、正確に日本語が出てこないと思惑そうな顔をしていた。最も印象に残っている「私のお父さんがね」という言葉を言ってから、文章を口にしていく。音声翻訳機はそれをそのままの順序で日本語に翻訳している。「父は（私が）バナナを食べると……」の「（私が）」が表示されていないことが、筆者にはかえって日本語らしく感じられる。

日本の幼児教育では、領域「言葉」の指導においては、**上書き的な共感指導**を試みる。「私はパイナップルが好きです。なぜなら、学校に来るとき、学校で昼食を食べるからです」と幼児が話した時、その文（言葉）を否定せず、保育者が理解したように「Nさんはパイナップルが好きなんですね。幼稚園の給食でよく食べますね」と、よりよい日本語を再度話しかけるようにして指導する。この場合は、音声翻訳した言葉に共感的に指導しても意味がないので、しばらくの間は、N児が音声翻訳機を使い慣れるように、いわば遊びながら使用し、まずは翻訳さ

れる感じを学習することが必要であるし、N児は、この翻訳される感じを楽しんでいるようである。

● しっかり聞かねばならない事例（2020年2月11日）

3歳女児M児は、父親がアメリカ人、母親が日本人で、2歳年上の兄がいる。昨年8月入園当初は、英語は話せるが日本語がほとんど話せず、理解もできなかった。

ある日M児が「おまえの……まえはMです……がやりたい」と言ってきた。よく聞くと「私の名前はMですがやりたい」と言っている。友だちが音声翻訳機を使うとき、最初に自分の名前を入力して翻訳している姿をMは見聞きしていた。「私の名前はMです」＝「音声翻訳機で遊びたい」とMは、その時知っている日本語をしばらく出し表現していたのだった。

● 音声翻訳機を手にして遊ぶ事例（2020年3月）

同じ3歳女児M児は、入園当初は英語のみで話していた。しかし、現在は**英語混じりの日本語**でよく喋っている。たとえば、「riceのおかわり下さい」「dressをchangeしたい」「〇〇くんが、Mのことをpush (scratch, kick) した」等。

以前からこの音声翻訳機に興味を示していたM児に、自由に話して遊んでよいと伝えて使わせてみた。翻訳がなかなかうまくいかないのが、ゆっくり、はっきり、大きな声で言うように伝えた。

M児は普段大きな声で話すことはできるが、早口で喋りがちである。しかし、この音声翻訳機を使うときは、「ゆっくり、はっきり」と話すことを意識することができるので、この遊びがお話の練習になればよいと思う。

卒業生Lは本格的に英語指導法を学んだことがなく、英語指導はあまり得意でない。今後のさらなる研究が必要であるが、すでにM児、N児は幼児のレベルでバイリンガル状態なので、これからも音声翻訳機で遊びながら、アメリカ英語と日本語の力を身に付けていってほしい。なお、ここで用いた音声翻訳機はポケットークではなく、eTalk5という類似品である。

（横井 一之）